【血統あれやこれや 8】

ミホシンザン対スワップス
―皐月賞の注目点

笠 雄二郎（りゅう ゆうじろう）

皐月賞も直前になって何頭かの有力馬が回避してしまった。今年はレベルの高い4歳馬が揃っていたのだが、やはりサバイバルゲームの感を呈してきた。

しかし、本来ならここで人気を分けたであろう各馬も、決して忘れてはならない。

サクライチモンジは、サクラショウリやリマンドから斬れ味の鋭さを受け継いでいて、フェアトライアル Fair Trial のいいところがよく出ていた。

サクラユタカオーは、テスコボーイのA級馬の特質を具えた馬で、スルガスンプジョウ的な爆発力を持っていた。こういうタイプは皐月賞にいちばん向いている。

サザンフィーバーのスプリングSの直線骨折は悲しい出来事だった。よどみのない速い平均ペースで引っ張ったために4コーナーを回る時点では、すでに彼の前脚は疲労のピークに達していたようだ。直線に入り手前を替える時に、左右→左右→左右→右左→右、と来たあと2回目の左が出なかった。

配合的には、サザンフィーバーは、パーソロン系に、決め手と力強さを欠くフィリュースの配合で、こうした組合せのパーソロン系は、典型的なハンディキャップタイプを出すことになる。

アズマゲインズは、母に快速の血を引くせいか、一瞬の脚しか使えず中山回りの方が得手だったが、これも脚部不安で去ってしまった。

●ミホシンザンの血統の歴史的価値

さて本題のミホシンザンに移ろう。

五冠馬シンザンは、ほとんど大レース勝馬を出さなかった。シンザンは Gainsborough 4×4 と、ソラリオの母でありセフトの祖母でもある Sun Worship 4×5 という配合をしていて、サイアーラインのポアラッスルとはタイプを異にしていて、どちらかと言えばソニバイの良さを伝えていた。

シンザンの血統には、ネアルコとハイペリオンの名が入ってないが、それでもなお、70年代においてスピード化の一途をたどる競馬シーンに、良い産駒を輩出し続けたのは立派で、特に父内国産馬の重賞競走でアロー産駒に引けを取らなかったことは特筆されてよい。このことは五冠の偉業に比して、ともすれば忘れられがちなことである。

シンザンが後継馬を生むには、どうしても ファロス ― ネアルコ のラインと、競馬のスピード化の因となったレディジョセフィン系の血の導入が必要だったと考えられる。

ファロス的繁殖牝馬でオールラウンドなスピードを持ったのはライジングフレームとソロナウェーだが、これらはどんな種牡馬とでもソコソコの成功を収めたが、これらとの間にシンザンは、スガノホマレ、シングン、キャプテンナムラ、ミナガワマンナを出した。

しかし、レディジョセフィン系は、やはりなくてはならぬスピードを保証する。

モンタヴァルは母の父がナスルーラで、ブランドフォード系サイアーラインへ、レディジョセフィンが浸透した最も好ましい馬だったが、この繁殖牝馬との間にシンザンは、シンザンミサキ、ロイヤルシンザンを生んだ。この交配では、アローエクスプレスにも入るウダイプー Udaipur とその全弟の Umidwar との、全兄妹クロスを生じ、Umidwar＝Udaipur クロスの他の多くの馬がそうであったように、オールラウンドなスピードと、素軽さを具現していた。

特にこのクロスは、レディジョセフィン系を同時に所有することで威力が倍加される傾向にあった（拙著『日本サラブレッド配合史』参照のこと）。

他に、レディジョセフィン系の導入としては、ナスルーラの仔ネアルーラの入るアサヒダイオーや、マームードの血の入るグレートタイタン、ゴールデンポートなどがいるが、それなりの成功は収めたものの、4歳春のクラシックの時点で一流と伍してみせるほどの早熟性やスピードは表現しなかった。

ミホシンザン――この、名前にいまひとつのもの足りなさを感じる馬は、そうしたシンザン産駒の先輩たちとは違ったイメージを抱かせる。

直牝系は5代母がクライマックスで、これはカネケヤキ（桜花賞、オークス）の母コンキュパインの母でもある。

クライマックスの祖母はレディジョセフィンの名牝駒レディジュラー Lady Juror である。快速で世界を席捲したレディジョセフィンの直牝系とシンザンとの間に一流馬が生まれたことは、なにかエキサイティングなブラッドスポーツの渦中に居るようで快い。

特にシンザンは菊花賞を制した時に、カネケヤキの大逃げを見ながら追走したわけで、カネケヤキが、日本へのレディジョセフィン系の侵攻の先駆けとなった歴史的意味合いとともに、記憶されるべき事項と思う。

ミホシンザンの母系には、レディ直牝系の血ばかりでなく、他にもレディ系の錚々たる名血が流入している。

ミホシンザンの母ナポリジョオーは Nearco 4×4、そしてその母タイタイは Lady Juror 4×5、Hyperion 4×4、Hurry On 4×5 の濃厚なクロスでまとめられていた。

レディジュラーは快速フェアトライアルの母でもあるが、これだけ(4×5)濃いクロスをとるのは、意想外に珍しいことで、ギャラントダンサーの父ギャラントマンがマーマハル Mah Mahal 3×3 になっている例などは、異色と言えよう。名血レディジョセフィンの血で、次なるA級馬へと止揚を試みなかった世界の生産者の盲点がここにあった？

タイタイは、父系にハイペリオンがレディ系を最高に吸収したテューダーミンストレルを通して、母系は直牝系として、レディ系の導入を果たしている。ナポリジョオーは、父系のムーティエの母の父から、ネアルコがレディ系を最高に吸収したナスルーラを通してレディ系を取り込んでいる。

ナポリジョオーは他に、4×4と充分なネアルコや、ハイペリオン、プリンスローズといったA級の血を集めているわけで、継続交配の素晴らしさと相まって、シンザンの最上の後継馬の母となる、歴史的な資格を充分に持っていた。

私も優駿4月号に載った吉田善哉氏の、ミホシンザンは血統的に魅力がない、という発言を残念に思っている。そりゃあノーザンテーストほどではないが、社台の他の種牡馬よりは上かもしれず、社台の名繁殖牝馬との交配も面白いくらいだ。

とまれ、ミホシンザンはこうして4歳クラシックシーズンにおけるスピードと、グレードの高い競走での力強さを具現することができた。

馬体の背っ垂れを不安視する向きもあるが、これはテューダーミンストレルの影響だろう。心配ないと思っている。レディ系の入るテスコボーイ、マームード、テッソなどもそういう面はあった。

さて、他の有力馬といえば、私の原稿はレースの2週前に書き始めなければ、まとめられないので新参についてよく検討する暇がない。

ただ何回か書いてきたように、牡馬においても、今年はスワップス系の血の入る馬が活躍している。

サクラサニーオー、ブラックスキー、スダホークには注目したいが、心情的にはデビュー前から目に留めていたブラックスキーが、その血統配合どおりマルゼンスキーの良さを継いで、馬力のある中距離馬となれるかどうか気になっている。

さて、これらスワップス系3頭がミホシンザン相手にどういった競馬をするのか？　スワップスは果たして大レース弱さを克服できるだろうか。（終）　　〈紙面の都合により血統表はF面にあります。〉

付記＝先週号で本誌を書いておられる青木氏が「シービー派といってよい当通信なのだ」といっているが、私には“シービー派”の実体が良くわかりません。私はシービーの強さを認めるものの、心情的には好きでもないし、また私の立場はフリーの寄稿者であって、血統を探究しようという試みは同一であっても、いかなる諸派にも属しておりません。私の、血統や競馬に関する考えは、私の署名ページだけです。とりあえず。